

## ～知財情報活動を振り返って～

元日本知的財産協会 知的財産情報検索委員会 委員長  
元特許検索競技大会 実行委員会 初代委員長  
中出 良治

アジア特許情報研究会設立 10 周年、おめでとうございます。

知財情報関係の世界から遠ざかって 5 年ほどですが、この日進月歩の知財情報の世界では、もはや浦島太郎の状況でしょう。約 20 年にわたる知財情報活動を振り返ると、単に懐かしいというだけでなく私の人生にとって忘れられない大きなイベントと言えるものでした。

私が知財情報の世界に飛び込んだ当時は電子出願が普及し始めた頃で、それまで特許情報をサーチするのは PATOLIS 抄録しかない時代でした。

毎日公報を読んでいると同業他社の技術者も同じようなことを考えているな～とか、おやと思えるような面白い見方をした技術とか、くだらない出願件数稼ぎのようなものまで色々でした。特許情報は無視できない、技術開発に必須だと感じたものです。

もしかしたらこの業務はシンクタンクになり得るのではと思ったことを覚えています。

私が本格的にこの世界に興味を抱き、身を投じようと決心したのは、1997 年に日本知的財産協会の活動に参加したことがきっかけです。この活動はそれまで経験してきたエンジニアでは得難い貴重なものを与えてくれました。特に社外の知財情報業界の色々な人達との巡り合により、様々な知識だけでなく幅広い人脈が得られたことが一番大きかったと思っています。年金生活の現在でもこれらの人達との付き合いが続いており、この先もお付き合いさせて頂ければと有難いと思っています。

8 年間にわたる知財協時代のことは思い出せばきりがありませんが、楽しかったこと、苦しかったこと色々あります。もう随分昔のことになるので細かいことは忘れましたが、いくつか頭に残っていることを挙げると、委員会活動の 2 年目に、今では当たり前になっている電子公報を対象にした商用特許情報検索データベースが普及し始め、この公報全文を対象にした「全文検索手法（フルテキスト検索手法）」を委員会活動の研究テーマに挙げ、取り纏めたことを覚えています。当時はこの研究成果が業界で話題になったものです。

昨今、新聞その他で経済活動や社会活動にビッグデータを活用する話が頻繁に取り上げられていますが、今思うと我々が研究に着手したテキストデータである特許情報こそがビッグデータの始まりではなかったかと思うと感慨深い気がします。

この知財協委員会活動というものは、色々な企業から派遣された人達があるテーマについて英知を出し合って研究しその成果を会員企業に還元するというものです。また知財情報の環境改善の為、特許行政や知財情報業者などへの提言を働きかけるものです。

この委員会活動成果は 1 社では成し得ない日本企業全体の成果とも言える点が重要であり、面白い点であったと考えています。参加した委員は委員会活動に非常に熱心であったし、そうであるから委員会活動終了後の飲み会などでより親交を深められたと思っています。

伊藤氏が立ち上げたこのアジア特許情報研究会も各社から参加した人達による研究活動の場であり、その成果を公表されています。その事に敬意を表したいと思います。

知財協委員会活動のテーマは会員企業の関心の高いものを選びました。上記の「全文検索手法の研究」以外に、それまで委員会活動成果は紙の媒体で発表していたものを、初めて

CDROM という電子媒体で発表した事や、海外特許庁提供のインターネット知財情報サービスの研究など数え切れません。またそれらの研究活動以外に知財協の研修の一つとして委員会活動の成果報告・情報交換を目的とした「知財情報活用セミナー」を色々な人の協力を頂いて企画、実現できたことも思い出深いものであります。

更に知財協システム委員会と協力して電子公報以前の過去分公報のテキスト化を特許庁に働きかけたことやその他の特許行政についての意見交換・要望などを行ったが、なかなか受け入れてもらえず随分苦労したことが思い出されます。

委員会活動の中でも、年に1回の泊りがけの情報委員会夏季セミナーは今でも懐かしい思い出であり、夜を明かしての議論や情報業者等との意見交換など、個々の委員会活動とは違った、本音の付き合いは普段の委員会活動以上に良いものでした。

知財協委員会活動以外の忘れられないものとして特許検索競技大会が挙げられます。

特に立ち上げ時の思い出は感慨深いものです。発端は「関西特許情報センター振興会の設立50周年記念イベントとして、サーチャー甲子園大会のようなことを企画しているので協力してもらえないか」と、50周年記念事業実行委員会の久保先生（奈良先端科学技術大学院大学）から私に打診があったことです。

丁度その年（2006年）の暮れに知財協情報検索委員会のOB有志の懇親会を淡路島で予定していたので、久保先生にも参加してもらい主旨を説明して頂きました。「サーチャーは縁の下での力持ち的な立場であって、職務の重要性のわりに社会的に脚光を浴びることは少ない。何とかしたい。サーチ技術を競い表彰するような行事をやりたい」という主旨でした。

「やろうじゃないか」という声が多くあがり、私がリーダー役となりその場の賛同者以外の人にも声をかけ10名ちょっとのメンバーが集まりました。

予算は少なかったので交通費や昼食費も出ない完全ボランティアでしたが、新幹線を使って名古屋から参加している人もいたので、さすがに交通費だけは補助して欲しいとお願いして、交通費だけは頂きました。

メンバーは非常に熱心で全員夢中になって取り組んだものです。あるメンバーは体調を崩し熱があっても宿題をこなし会議に参加するというくらいでした。

当初この大阪での検索競技大会にどれだけ人が集まるか心配していましたが、募集開始早々に東京など遠方からの応募があり、またあちこちで評判になっているという話を聞くにつれメンバー全員身の引き締まる思いがしました。最終的には50名を超える応募があり抽選をしなければならない盛況ぶりでした。というのも定員は所有しているPCの関係で40名に満たなかったのです。

大会が終わり大会参加者の解答をみて愕然としました。我々メンバーの想像していたレベルからあまりにもかけ離れていたからです。表彰に値する人は2人しかいませんでした。優勝した人はずば抜けており、現在この業界では誰もが知っている著名人となって活躍しています。この限りでは嬉しいのですが、メンバーの間で交わされた意見は、「サーチャーのレベルが落ちているのでは？サーチャーに対する教育を考えないといけないのでは？」というものでした。ただ参加者のアンケート結果には、検索技術力を上げたいとの声が多くあり、これが救いでした。

特許検索競技大会はこの1回きりと思っていましたが、(独)工業所有権情報・研修館(以下INPITと略す)が興味を示し、その協力を得てINPITと関西特許情報センター振興会の

共催で2回、3回と続き、現在の(一財)工業所有権協力センターによる特許検索競技大会につながっています。

現在の特許検索競技大会が大変好評で、レベル認定証を発行するなど隆盛を誇っていると聞いており、検索大会の立ち上げ～黎明期に携わった者として喜ばしい限りです。

この特許検索競技大会の成果をヨーロッパ特許庁主催の2008年と2009年のEast meets West会議や欧州のIPI-ConfEX2010や米国PIUGのannual Conference2010で発表し大変な注目を浴びました。PIUGの会長からは、「日本で面白いことをしているらしいね。あんたがその委員長か」と言われ、欧州でしゃべったことが米国のPIUGの会長の耳にまで届いていたことに感嘆したのを覚えています。

これらの欧米知財情報団体との情報意見交換の中でも、特に衝撃を受け今でも鮮明に覚えているのは、欧州PDGのMinoo会長を含めた幹部との面談です。

2008年に私と桐山氏(当時の検索大会実行委員会副委員長)の2人でデュッセルドルフへ乗り込み、特許検索競技大会やその他について意見交換を行った時のことです。

当時彼らもサーチャーの資格試験を模索していて、日本の特許検索競技大会が「オンライン検索を採用しているところが非常に面白い、参考になる」と言われました。その後、欧州の資格試験検討WGの代表を日本に招待するなど情報交換を続け、特許検索競技大会のやり方などにも良い影響を受けたものです。

それはそれで良かったのは勿論ですが私が感銘したのは、PDGのコンセプトでした。Minoo会長の言った「我々サーチャーは、知財に関するInformation Scientistを目指すんだ」の言葉です。「Information Scientistとは何だ」と聞いたら、ScientistというのはElectricity分野のScientistやChemistry分野のScientistなど各分野の専門家だが、Electricity、Chemistryなど各分野をまたがる知財に関するInformationを取り扱うScientistが「Information Scientist」だという説明でした。

PDGの目指すところは、サーチャーがScientistと呼ばれるに値する尊敬とPatent Lawyerに相当する報酬が得られるような存在に高めたいというものでした。

ホテルに帰るタクシーの中でそのことを考えながら、「やはり日本の中だけで考えていてはだめだな～」と痛感したのを覚えています。PDGの考えは、サーチャーという従来の枠を超えたコンセプトであり、日本では思いもつかなかった異質な価値観で、それに遭遇したわけであります。

知財協時代、検索競技大会時代を通じ特許調査、特許検索はどうあるべきかを模索してきましたが、サーチャーはベーシック技術として少なくとも調査のやり方など、所謂「How to」を習得する必要があります。しかし特許情報などのビッグデータのAI利用が進むであろう時代を考えると、これからのサーチャーは、調査から何を導くのかという本質を考え、「How to」からの飛躍を意識せざるを得ないでしょう。

知財情報を活用したシンクタンクのような存在に関わるInformation Scientistが実現すれば最高です。

過去を思い出しながらこの寄稿文を書いていると、あんなことがあったとか、あの時こうしておけば良かったなど様々なことが思い出されてきます。

私は昨年古希を迎え、今までの人生を振り返ることも多々あります。振り返るにつれ同じ釜の飯を食った仲間のことが懐かしく、友人の大切さを実感しています。

最後に、アジア特許情報研究会が今後とも益々発展されることを、お祈り申し上げます。

(2018年8月13日受理)